

## はしがき

ペリー艦隊の来航以来、日米が正式に関係を持ち始めて約150年余。その途中にあっては、日米開戦という不幸な一時期もあり、戦後もまた、貿易摩擦などでギクシャクとした時期もあったが、日本とアメリカは「民主主義」「資本主義」というおおむね近い価値観を共有しているといえる。もちろん悠久の歴史からみれば両国関係の歴史は短いかもしれない。だが今日、日米は「アメリカがクシャミをすれば日本は風邪を引く」と揶揄されるくらい濃蜜な関係を構築している。

この150年余の間であって、お互いの国に、直接的に、また、間接的に影響を及ぼした人物に焦点を合わせてテキストを編んでみた。アメリカは1776年建国の若い国で、それ以前は英国等の植民地であったが故に、一部厳密にはアメリカ人ではない人物も混ざっている。最後の章の三浦按針（ウィリアム・アダムス）がその人であるが、英米の中心をなすアングロ・サクソンという観点からあえて取り上げていると理解願いたい。

このテキストで取り上げた人々の分野は、政治（政治、軍、外交）、社会（教育、思想）、ビジネス（経済・企業）、文化（文学、アニメ、食、芸能、スポーツ）などに分かれてはいるが、活動の範囲が広すぎてはつきりと区分しづらいケースもある。これらの人物を通じて、日本とアメリカはお互いに理解を深めたはずだ。また、将来に亘って良好な関係を続けていくためには、日米に橋を懸けた人々の功績を振り返って、それらがお互いの社会・文化にどのような影響を与えたのかを知ることは無駄ではない。

このテキストで触れている1853年（1600年は例外）から現代までを眺めてみれば、いかに両国がその影響を享受しあっているかが分かる。日本の消費者で、「スーパー」で買い物をしたことのない人、「マクドナルド」で食事をしたことのない人はまずないだろうし、iPodで音楽を楽しむ日米の若者もいかに多いことか。また、安藤百福<sup>ももふく</sup>の名は知らなくてもカップヌードルを知らない米国人の数は少なからう。世代によって印象度は異なるとしても、クラーク、マッカーサー、ライシャワーの名は多くの日本人の知るところだ。逆に、宮崎駿、村上春樹両氏の名は想像以上にアメリカ人に認知されているだろう。

諸般の事情で取り上げることができなかったが、禅<sup>だいせつ</sup>の鈴木大拙、ウォークマンの井深大<sup>まさる</sup>・盛田昭夫、J. F. ケネディ、ビル・ゲイツなども本テキストの基準からいけば日米に橋を懸けた人といえるだろう。大上段に構えることなく、ヒト、モノ、コトから両国のつながりを考えてみるのも有意義なことではなからうか。

平成 19 年初夏  
明日香村にて  
和 久 豊

# 本書の構成と利用法

## 1. 取り上げている人物と章の順序

本書は全部で20章から成り立っています。日米の人物をそれぞれ10人ずつ掲載しています。但し、年代順には配置してありません。年代の順位は「略年表」に名前と生誕年を記しておきましたので、一覧はそちらの「略年表」をご覧ください。

日米お互いに影響を与えた人物（功績）を取り上げていますが、一人、イングランド・ケント州出身の William Adams = 三浦按針が混ざっています。歴史的な年に漂着して、歴史的な人物と会見していますので、あえて取り上げています。

1章～20章まで、ご採用いただいた先生方のご都合で、章立ての順序とは別に読んでいかれてもいいと思います。担当の学部、学年、興味の度合い等々でお決め下さい。ただ、*Coffee Break* の「読みの技術」(Reading Skill) や「パラグラフ」「エッセイの構成」などは本書の順で分かり易いように配列しています。

## 2. 各章の内容

各章は、「タイトル」「写真」「Warming-up」「Reading Passage」「Notes」「Reading Comprehension」「Listening Comprehension」「英語に直してみよう」+「Coffee Break」から成り立っています。

- ① タイトル……人名の下に（生年～没年）を入れて、いつ頃の人物かが分かるようにしています。
- ② 人物の写真……Seeing is believing で、その人物が一目で分かるようにできるだけ大きな写真を掲載しています。但し、古い時代で、写真が存在しない人物の場合は、銅像やイラストで置き換えています。
- ③ Warming-up ……その章の理解にあたって、あらかじめ最低限の予備知識を学生に与えて理解し易いように考えています。
- ④ Reading Passage ……「本文」は Benfield 氏の平易な英文で 400 words 前後です。CDに「範読」を吹き込んでありますので、学生には「単語の読み方」「文章のリズム」「パラグラフ毎の全体の意味」に留意するように指示して聞かせると効果的です。
- ⑤ Notes ……英文は平易ではありますが、現代の学生にはやや難しいと思われる語句に注をつけています。
- ⑥ Reading Comprehension ……「英文内容理解」のために、各章5問ずつ「問い」が設けてあります。ただし、必要な情報のみを読み取る形式、つまり

Scanning (Scan Reading) の技法を使うやり方です。

- ⑦ Listening Comprehension ……本文の内容の一部を、また関連ある話題を「対話形式」で再現してあります。CD の対話を聞きとって「空欄」に適語を入れる問題です。日本人にとって難解な「発音」を中心に聞き取れるようにブランクを設けてあります。

また、時間があるようでしたら、対話文はペアでそれぞれアメリカ人と日本人になって、ロールプレイの練習ができます。

- ⑧ 英語に直してみよう……各章で出てきた表現を中心に、それらの語句を使った英作文です。一応、並べ替えが多数ですが、一部短文の英作文も混じっています。
- ⑨ Coffee Break ……堅苦しいことは抜きに、各章に関連した「こぼれ話」的な話題を提供しています。Reading skills, Paragraph, Essay などの説明もこの欄を借りています。肩肘張らずに文字通り“一服”して下さい。

### 3. 本書の狙い

*Across the Pacific Ocean* は、Basic class から Intermediate class までを対象にしています。今まで、たくさんの分量を読みこなしていない人たちが、英文のしくみ、英文パラグラフのしくみ、エッセイの構成、聞き取り、英作なども学べる「総合教材」として編んであります。

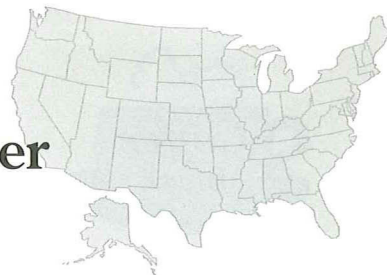
本テキストを契機にして、Oxford Bookworms Library などで大量に読む習慣を身につけ、英文ウェブサイトの記事なども Scanning できるよう応用してもらいたいものです。

# Contents

Chapter	<b>1. Douglas MacArthur</b> .....	1
	(戦後の日本を方向づけた人物)	
Chapter	<b>2. Edwin O. Reischauer</b> .....	6
	(もっとも愛された駐日大使)	
Chapter	<b>3. William Smith Clark</b> .....	11
	(少年よ大志を抱け)	
Chapter	<b>4. Matthew Calbraith Perry</b> .....	16
	(黒船, 襲来!)	
Chapter	<b>5. Elvis Presley</b> .....	21
	(世界中を熱狂させたロックンローラー)	
Chapter	<b>6. Yukichi Fukuzawa</b> .....	26
	(天八人ノ上二人ヲ造ラス)	
Chapter	<b>7. Donald Keene</b> .....	31
	(日本文化を世界へ)	
Chapter	<b>8. Hayao Miyazaki</b> .....	36
	(千と千尋の神隠し)	
Chapter	<b>9. Momofuku Ando</b> .....	41
	(インスタントラーメン王)	
Chapter	<b>10. Umeko Tsuda</b> .....	46
	(女子教育に捧げた人生)	

Chapter <b>11.</b>	<b>Steve Jobs</b> .....	51
	(コンピュータと音楽プレーヤーの変革)	
Chapter <b>12.</b>	<b>Haruki Murakami</b> .....	56
	(世界は『ノルウェイの森』を歩く)	
Chapter <b>13.</b>	<b>Soichiro Honda</b> .....	61
	(ホンダは世界を疾走する)	
Chapter <b>14.</b>	<b>Clarence Saunders</b> .....	66
	(セルフサービス方式のビジネスモデル)	
Chapter <b>15.</b>	<b>The McDonald Brothers and Ray Kroc</b> .....	71
	(君知るや, マックの由来)	
Chapter <b>16.</b>	<b>Shigeru Yoshida</b> .....	76
	(サンフランシスコ講和条約)	
Chapter <b>17.</b>	<b>John Manjiro</b> .....	81
	(中浜万次郎 漁師の倅アメリカへ)	
Chapter <b>18.</b>	<b>Hideo Nomo</b> .....	86
	(野茂英雄, 大リーガーの開拓者)	
Chapter <b>19.</b>	<b>Kyu Sakamoto</b> .....	91
	(上を向いて歩こう)	
Chapter <b>20.</b>	<b>William Adams (Miura Anjin)</b> .....	96
	(シェークスピアと同時代人, 三浦按針)	
略年表 .....		101

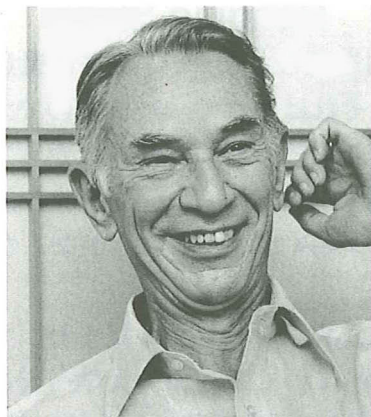




## Chapter 2

# Edwin O. Reischauer

(1910 – 1990)



**Warming-up**

エドウィン・ライシャワー。駐日アメリカ大使で、これほど慕われた大使もないだろう。単にハル夫人が日本人ということだけでなく、京都をこよなく愛したライシャワー氏自身の、日本の文化・思想についての深い見識と理解がもたらした結果だろう。(博士論文は僧円仁についてである) ジョン・F・ケネディも見事な人選をしたものだ。日本人の暴漢に太腿を刺傷されたときも、日本を気遣う声明を出し、日本国民を恨むことは一切なかった。こういう知日派大使のお陰で、どれだけ日米間の感情のもつれが解きほぐされ、友好が進んだことか。文字通り「太平洋の懸け橋」となった79年の人生であった。



### Reading Passage



1-04

Japan was for a long time regarded in the West as a mysterious country. One reason why this impression persisted for such a long time was the relatively small number of Westerners who were familiar enough with Japan's language and culture to explain the country to the outside world. One of the most important and influential Westerners to take up this challenge was the American scholar, teacher and diplomat Edwin O. Reischauer, whose life and career formed a vital bridge between Japan and the English-speaking world.

Reischauer was born in Japan in 1910 as the son of American missionaries who were teaching at Aoyama Gakuin University in Tokyo. He spent the first 17 years of his life in

Japan, becoming completely fluent in the language and developing a love of the culture that would last his whole life. He was a brilliant student. His education began in the United States at Oberlin College, and he went on to study at Harvard and at the Sorbonne in Paris. He then returned to Japan to study at both Tokyo and Kyoto Universities.

As tension leading to World War II began to mount, Reischauer left Japan in 1937. After Pearl Harbor, his language skills led him to be enlisted in the US Army to teach Japanese to military code specialists. After the war, he became Professor of Far Eastern Languages at Harvard, and later a professor of Japanese history at the same university.

After the death of his first wife in 1955, he again returned to Japan, where he met and married the journalist Haru Matsukata, the daughter of Prince Masayoshi Matsukata.

Reischauer believed that Japan was a very important country for the West, and he was saddened by the lack of knowledge about Japan, and Asia in general, especially in the United States. After the US-Japan Security Treaty was passed in 1960, he wrote a famous article criticizing US policy toward Japan. The article caught the attention of President John F. Kennedy, and he decided Reischauer would be perfect for the role of US ambassador to Japan. Reischauer took up the position in 1961. He and his wife embarked on a hectic schedule of speaking all over the country. By the time he resigned in 1966, Reischauer had done more than almost anyone to improve relations between the United States and Japan and to help bridge the understanding gap between the two countries.

After his retirement, Reischauer continued his efforts to help people understand Japan, but now as a scholar and teacher rather than an ambassador. He published two very influential books, *Japan: The Story of a Nation* (1970) and *The Japanese* (1977). In 1968, he received the Imperial Order of the Rising Sun from Emperor Showa and Prime Minister Eisaku Satoh. He also founded the Reischauer Institute for Japanese Studies at Harvard and a similar one at Johns Hopkins University in Baltimore, Maryland.

This uniquely gifted teacher and communicator died at his home in La Jolla, California in 1990.

## Notes

**Edwin O. Reischauer** (1910-1990) エドウィン・ライシャワー (1961-66 駐日大使) **the West** 西洋, 欧米 (ヨーロッパとアメリカを指す) **persist** 残存する **take up this challenge** (日本を外の世界に説明するという) 挑戦にいとむ **vital bridge** 不可欠な懸け橋 **Oberlin College** オーバーリン大学 (Ohio 州 Oberlin にある1833年創立の米国初の男女共学の大学。1962年黒人女性初の卒業生を出した。尚, Oberlin は聖職者の名前で, 上記地名にもなり, また, 桜美林大学の名も彼にちなんでいる。) **the Sorbonne** ソルボンヌ大学 (パリ第4大学の俗称) **enlist** 入隊する **military code** 軍事暗号 **Far Eastern Languages** 極東言語学部 **Prince Masayoshi Matsukata** 松方正義公爵 (1835-1924) 薩摩藩士で蔵相・首相を歴任した人物でハルの父 **the U.S.-Japan Security Treaty** 日米安全保障条約 **embark on** ～～に着手する **Japan: The Story of a Nation** 『ライシャワーの日本史』 **The Japanese** 『日本人』 **the Imperial Order of the Rising Sun** 旭日章 **the Reischauer Institute** ライシャワー日本研究所

## Reading Comprehension

*Read and get the necessary information by scanning.*

1. How was Japan regarded for a long time in the West?

---

2. When and where was Edwin Reischauer born ?

---

3. After World War II, what kind of post did he take up at Harvard University?

---

4. What attracted President John F. Kennedy to Reischauer?

---

5. According to the 6th paragraph, how many books did Reischauer write?

---

## Listening Comprehension



1-05

1. *Listen to the next dialog and fill in the blanks.*

J = Japanese, A = American

J: Did you learn very much about Japan in school?

A: Not very much, ( ) afraid. We mostly learned about Japan in connection with Pearl Harbor and the Pacific War.

J: So how did you get interested in Japan?

A: Well, a friend of mine recommended a great book to me.

J: What was it?

A: The title is just *The Japanese*. It was ( ) by Edwin Reischauer. It was a fantastic introduction to the country and the people.

J: Yes, I've ( ) Edwin Reischauer's name, but I don't know much about him.

A: He was American, but he was born in Japan because his parents were missionaries.



J: So he could speak Japanese very well, I suppose.

A: Yes he was completely ( ). He became a very famous scholar of Japanese language and history, and eventually became the US ambassador to Japan.

J: He ( ) like a fascinating man.

2. クラス内でペアを作り、この対話を二人で練習してみよう。

## 英語に直してみよう

*Complete each sentence using all the words and phrases.*

1. ライシャワーは松方正義の娘、ハルと結婚しました。

Masayoshi Matsukata, Haru, Reischauer, got married, the daughter, to, of, Prince

---

2. イラクで戦争の緊張が高まったので、ジャーナリストたちはその国を離れねばなりません。

the country, tension, the Iraqi War, journalists, had to, began to, mount, leave, As, to, many, leading

---

---

3. ライシャワーは駐日アメリカ大使として、アメリカ人が日本を理解するよう努力した。

Reischauer, American people, Japan, U.S. ambassador, Japan, efforts, made, to help, understand, as, to

---

---



## 和製英語と造語力

日本で生まれて「英語らしく」使っているが、日本でしか通用しない「英語」を「和製英語」と言います。戦後生まれの傑作は野球の *nighter* (ナイター = night game) でしょう。「野球」それ自体が baseball の翻訳。野原で球遊びの光景。隣の中国では「棒球」。昭和30年代のOG, 現代のOL, CAも和製英語です。それぞれ office girl, office lady, cabin attendant の略。正確には office worker, flight attendant でしょうか。

本場の英語に加えて和製英語に省略語 (ネオコン, コンサバetc) と、現代の日本にはカタカナ語があふれかえっています。若い女性のファッション誌など、日本語とカタカナ語が半々に近いページだってあります。「パンプス」「ニーハイ」「レギンス」と聞いてサッと理解できる男性が何割いるでしょう。

明治時代の戯れ歌に、

「ギョエーテとは俺のことかとゲーテいい」(Goethe)

というのがあります。カタカタ表記の難しさ又は「揺れ」をからかった歌で、なかなか粋なものですね。現代でいえば、「サラリーマン川柳」的でしょうか。

それにしても現代と較べて明治の先達は偉かった。西洋の概念を見事に「漢語」に置き換えて造語し、日本語の語彙を豊かにしています。newspaper → 新聞, society → 社会, philosophy → 哲学, philosopher を「哲人, 哲学者」と翻訳したのは、東洋にはすでに孔子, 孟子の「聖人」がいたから、西洋の場合をきちんと分けて「哲人」としたのだそうです。それもこれも明治の知識人たちには「漢語」の素養があったからでしょう。江戸期には、子供たちのおよそ半分が藩校や寺子屋で「読み書き算盤」を習っていたと言います。これは当時の世界では群を抜く識字率だそうです。その「読み」は漢文の素読。従って、明治期の知識人たちの頭には豊富な漢語の蓄えがあったから、英語 (外国語) → 漢語という変換 (造語や翻訳) が見事にできたのでしょう。

